
続々・恋愛小説 ～そして物語はハッピー・エンドへ～

May

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続々・恋愛小説　～そして物語はハッピー・エンドへ～

【Nコード】

N4410B

【作者名】

May

【あらすじ】

麗音と付き合って、早くも六年も経った。私も麗音も大人になった。ある日、麗音の家にお呼ばれして――？『恋愛』シリーズ第四だんとして送る、『恋愛小説』の物語の完結編！アイと麗音との恋の行くへは！？

麗音と出逢って、早くも六度目の夏を迎えた。

私は二十三歳に、麗音は十八歳の高校三年生になって、私たちはもう立派な大人だ。あれほど私と麗音との交際を反対していた両親は、私と麗音が一年通い続けて、やっと折れてくれた。

母が半年で折れ、頑固な父は、なかなか折れず、一年経って、やっと折れてくれたのだ。

その時、麗音は両親に、こう言ったのだ。

「あと二年して、僕が二十歳になったら、娘さん——アイさんを手放す気でいてください」

その言葉で、母は卒倒しそうになった。

しかし、父ははつきりとした意志で、最後に麗音に伝えた。

「娘を——アイを幸せにしてやってくれ……」

「はい」

麗音は確かな言葉で、そう言った。

麗音は、昔と変わらず可愛い顔で笑う。
けれど、麗音が時々見せる、大人っぽい顔は、麗音が年下だということを忘れさせる。

子供っぽい麗音と、大人っぽい麗音。
どちらが本当の麗音なのか、未だに私にはわからない。

本当の麗音は、一体どの麗音なの？
いつか、本当の自分を見せてね、麗音？

そう言うと、麗音は笑いながら言った。

「いつか、ね」

麗音はすぐに、私を茶化してくる。でも、そんな麗音の幼さも、私が麗音を好きな理由。

麗音は高校を卒業したら、警察を養成する学校に進学するらしい。

麗音のお父さんは、警視庁の警視で、麗音はそんな優秀なお父さんに憧れているらしい。

麗音の警察服の姿……見てみたいかも。

だから麗音は、一生懸命受験勉強に勤しんでいる。

受験か……。私も高校生の時、せめて短大だけでも出とけて、両親に言われて、一生懸命勉強してたなあ……。
ああ、懐かしい。

そんな経験を生かして、私は麗音の家庭教師をしている。

麗音のお母さんはとても優しい人で、私のことを、快く受け入れてくれた。

さすがに、五つも年上の私と麗音が付き合っていることには驚いていたが、

「うちは好きに恋愛させてるから、年の差なんて、関係ないわよ。まだまだ世話がかかるけど、これからよろしくね」

と、これまた快く受け入れてくれた。例の警視のお父さんには、まだ挨拶はしてはいないが、そのうち挨拶をしに行くつもりだ。

「その時は、結婚の報告かもな」

麗音が、ふざけてそう言った。

「もう」

照れて本当のことは言えなかったけれど、本当は、すごく嬉しかったよ。

いつか、本当になるといいな。

と、思っていたら、その一週間後に、麗音の家の食事に招待された。

麗音の言うことだと、麗音のお父さんが、一目、私のことを見たいと、言っているらしい。

そして当日、私はできるだけケイソな感じの服装に着替えて、麗音の家に向かった。

インターホンを鳴らすと、麗音が出迎えてくれて、リビングに連れて行ってくれた。

そこには、食卓の椅子に座り、読んでいる新聞紙の所為で、顔が

完璧に隠れてしまっている男性がいた。

「は、初めまして」

緊張して、嚙んでしまいそうだ。

「麗音君とお付き合ひさせてもらっています、美鈴アイでスッ！」

最後、完璧に声が裏返った。

「アイさん、リラックス、リラックス……」

麗音にまで言われてしまうとは、情けない。「その通りです。とりあえず落ち着いてください、美鈴アイさん」

その時、今まで黙っていた麗音のお父さんが、初めて口を開いた。

「初めまして。麗音の父の、こうたりお國府田梨桜と申します。どうぞ腰を降ろしてください、アイさん」

そして、麗音のお父さんは、新聞紙を畳み、顔を見せた。

「若い……」

ついつい、口が滑ってしまった。だって、十八歳の子供の父親とは思えないほど、その人の外見が若く見えた。

「ごめんなさい」

「いえ、実際に私は若いですから。私は十八歳の時、妻と結婚したんですよ。おまけに、あなたみたいに、年が離れている彼女とね」

ハッとなって、お母さんの方を振り向いた。麗音のお母さんは、ニコニコとしている。

「実は、私の方が七歳も年上なんですよ」それは知らなかった。麗音は何かを堪えるように、口元を抑えている。

なるほど。この間お母さんに挨拶にいった時、あんな快く受け入れてくれたのは、こういうことだったんだ。

「五歳の差なんて、私たちと比べたら、小さいですよ」

お母さんが、笑いながら言った。

「子は親に似るといいますが、まさにその通りですね」

お父さんも、半分笑っているように見えた。

「じゃあ、認めてもらえるんですか？ 私と麗音君の仲を」

私は、震える声で言った。

「認めるも何も……。始めから反対するつもりはありませんよ。
あなたのことは、麗音からいつも聞いていましたからね」

ああ。私だけテンパってたのが、馬鹿みたいだ。麗音、あと
で説教だからね。

「さっさ！ 食事にしましょう。アイさん、席に着いてください。
麗音もよ」

食事の時、いろいろな話を聞いた。
二人の出逢い、どんな風に付き合っていたが。小さい頃の麗音

の話。 沢山沢山、いろいろな話を聞いた。

これで少し、距離が縮まったような気がする。

食事が終わったあと、少し話をして、私は帰ることになった。「まあまあ。女の子が一人で夜遅くに帰るなんて、危ないわ！ 麗音、アイさんを送っていきなさい」

「言われなくても」

私は御礼を言って、麗音と一緒に家を出た。

「麗音、さっきの話、どういうこと？」

勿論、食事前の話だ。

「驚いた？」

麗音は悪戯に笑って、小さく舌を出した。

「そういうことは、前もって言ってよ！ いきなり言われたら、びつくりするでしょ？」

ほぼ、説教状態。

「驚かせたかったの。 だからごめん」

麗音は半分泣きそうな目で言う。

嘘泣きだってわかっていても、この顔には弱いんだよね、私。

「もういいよ……」

「僕がやだ。 お仕置きして、アイさん？」

……お仕置き？

「アイさんの好きにしていいいよ、僕のこと」

それはつまり……。

「アイさんが望むなら、キスもするし……一肌、脱ぐよ……？」
「脱がんでいい！」

何となく、麗音の性格がわかってきたかも。

「じゃあ、僕からしますね」

次の瞬間には、麗音によって、私の唇は塞がれていた。「アイさん、真つ赤ですよ？ 顔」

「麗音がいきなりキスするからでしょ！」

麗音はそのまま、あっかんべー＋ウインク。

笑顔は天使。 けど、性格は――

「小悪魔……」

「やっと気付いた？」

なるほど。

全く、麗音はとんでもないヤツだ。

「でも、好きでしょ？」

「す、好きよ」

惚れた弱みってやつだな。 何でも許せてしまう。

「帰りましょ」

「はいはい」

私たちは、手を繋いで歩き出した。

その時、麗音が言った。

『そのうち、ずっと同じ家に帰りましょうね』

そんなあなたも、大好きだよ。

私たちの物語は、これでおしまい。
一番望んでいた展開で。

そして、物語はハッピー・エンドへ――

F i n

（後書き）

『恋愛小説』の物語が完結しました！楽しんでもらえたでしょうか？少し大人になった二人は、ハッピー・エンドで幸せになるでしょう。このあとの続きは、皆さんの想像にお任せします。感想と評価、お願いします。では。 2007・1・26、少し前に日付が変わった日に、May。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4410b/>

続々・恋愛小説 ～そして物語はハッピー・エンドへ～

2010年10月22日00時25分発行